

問われるのは総合力

——科目数の多さに惑わされず、
横断的理解で応用力を養成しよう——

主任講師

五十嵐淳



公務員試験は、将来研究職を目指す人のための試験ではありません。問われているのは、専門知識の暗記量ではなく(そもそも仕事に出てからそうした知識を使う場面は決して多くはないのです)、物事をよく理解して、そこから得られた知識や論理を幅広い分野に活用できる応用力なのです。

皆さん方もお気づきでしょうが、二十歳を過ぎれば機械的な丸暗記は誰でも苦手になります。しかしそれと反比例して、物事の見解力は増していきます。また、ただでさえ暗記力が落ちているのに、暗記だけで膨大な科目数をカバーするのはまず不可能です。それに対して、理解するという点を重視して勉強すれば、民法で身につけた考え方が行政法でも使えたり、政治学の知識が憲法にも応用できたりと、結果的には時間の節約になるだけでなく、公務員試験全体で問われている応用力、総合力を身につけることにつながるのです。

では、理解するためには何が必要なのでしょう。まずは、下地となる素養が重要です。たとえば、国語力がなければ法律学の抽象的な理論を理解することはできませんし、最低限の数学の知識がなければ経済学の理論を使いこなすこともできません。そして歴史の知識が乏しければ、その当時の社会を説明し変革するために生まれてきたさまざまな理論や、その積み重ねとしての学説史を深く理解することはできません。歴史の知識はまた、憲法や政治学、哲学、社会学、国際関係、地理、時事問題等、一見無関係に見える広範な科目を有機的に結合させる媒介としても機能します。それに気づくことができれば、あとは目から鱗が落ちるように、現代社会の成り立ちや仕組みが立体的に目の前に浮かび上がってくるでしょう。

物を知るということの喜びは、こうした瞬間に訪れるのです。ここまで来れば新しい知識も苦にならずにどんどん吸収できますし、限られた知識を類推して未知の問題を解けるようになります。さらには、社会を分析したり批判する視点も養われ、今まで敬遠していた新聞の硬派記事も面白く感じられるようになるはず。試験の最終段階に直面させられる論文や面接、集団討論でも、自分の見解を自信を持って述べるようになるのです。

公務員試験の勉強を、決して大学受験のように、その場限りの無味乾燥なものと考えないでください。合格することは勿論重要ですが、皆さん方にはぜひ、真の実力＝総合的な理解力を身につけてほしい。この能力こそ、社会に出てからも生涯にわたって皆さんの強い武器となるからです。講義は、まさにこうした総合力を身につけるためにあります。独学では、知識が断片化するだけでなく、単調な暗記作業によりやる気も失せがちです。教室では、知的好奇心を満たし、物を知る喜びを実感してもらいます。喜治塾の講義は、専門分化した大学の講義とはひと味もふた味も違った講義です。どうぞ大いに期待してください。

確認

きちんと復習できているかを試し、かつ応用力を磨く

●●● トリプル復習システム

確認テスト ＋解説

● 次の講義の前

知っている問題だけでなく、見たことのないような問題にどうアプローチし、どう応用力を働かせるかを練習し解説する。

演習 (模擬テスト)

教養問題なども含めた実践練習を行う。